

続詞花集の注釈

— 神習文庫本の濱臣注をめぐって —

鈴木徳男

一、はじめに

続詞花和歌集の主要伝本について、おもに書写年代につき略述する。詳しくは、松野陽一氏「続詞花集雑考」(『平安文学研究』三十六輯、昭和四一年六月)、河合一也氏「続詞花和歌集の伝本研究ノート」(『研修ノート』十五号、昭和六三年)を参照。

① 田中教忠旧蔵本

『田中教忠蔵書目録』(昭和五七年)によれば、「(重文)続詞花和歌集 二十卷 二帖 南北朝頃写。本文料紙厚様斐紙。綴葉装金銀切箔、金銀霞文様原表紙(続詞花和歌集上(下)の外題がある。)附。每半葉九行仮名交り、両面書写。字面の高さ、約六寸四分。下巻末に撰者九条三位隆教本を以て書写校合した由の奥書がある。本帖は筆者を為相と審定した風早相公(実種)の証文一通がある由、江戸時代の桐箱の上に墨書が見える」とある。前掲の河合一也氏「続詞花和歌集の伝本研究ノート」は、「風早相公(実種)の証文一通」を取り上げて、尊経閣旧蔵本と認定する。九条三位隆教本を以て書写校合した由の奥書によって、おそらくは以下の諸本の原本に当たるものと思われる。なお、『田中教忠蔵書目録』には撰者の跋文の有無は記されていないが、松野陽一氏のご教示によると、有るとのことである。

②陽明文庫本（近・二四四・三七五）

江戸初期写、外題は近衛尚嗣（一六五三薨）写。なお、陽明叢書5に影印、解題がある。拙著『統詞花和歌集の研究』（和泉書院）本文篇底本。

③大理図書館本（九一一・二三・イ・四七）

宝暦十年（一七六〇）、猪苗代兼誼写。奥書によつて、「久我家御本」書写本を写していることが知られる。また、上巻巻末に「明和元年九月十八日一校畢」（朱筆）とある。なお、新編国歌大観の底本。

④静嘉堂文庫本 甲本（五二〇・九・二二二六九）

江戸初期写、松井簡治旧蔵。

⑤三手文庫本（未・一八五）

江戸中期写。今井似閑自書奥書付『書籍奉納目録』（自跋の日付は享保六年（一七二二）七月二十日）にみえる。

⑥無窮会神習文庫本（九九三七・井）

（本稿でとりあげる清水濱臣の書写本、後述）

⑦鶴舞図書館河村文庫本（河ソ・一〇二・二三三）

江戸中期写、河村益根（宝暦六年生、文政二年（一八一九）没）旧蔵。

⑧静嘉堂文庫本 乙本（五二〇・九・二二二七二）

文政五年（一八二二）、埴包忠写。

⑨群書類従卷一四八所収本

「右統詞花集以織部正乘尹及岸本永膺秘本校正」の奥書があり、織部正乘尹は『寛政重修諸家譜』によると（卷一・七八頁）、大給松平の乘尹（安永六年（一七七七）生まれ）。

⑩ 日本大学総合図書館本（九二・一三七）

前掲の河合一也氏「統詞花和歌集の伝本研究ノート」によると、③天理図書館本は、この日大本を忠実に書写したものと説明している。

①から⑩までの諸本は異本系統に立つ伝本はなく（⑧⑨は撰者の跋文を持たない）、原本と思われる①を除くと、江戸時代の書写である（古筆切にも存在を聞かない）。こうして伝本を一覧すると、成立後、本集が活用されたとは言いがたい状況である。例えば、次のような伝承経路が考えられようか。当初、歌道家所有（河合氏論文参照）の本が近衛や久我の公家のもとで転写され（②や③奥書）、さらに有力大名家に伝わり（④奥書）、その間に国学者らの目に触れて流布した。そのなかで、享受の面から、注釈の書き入れられた⑥無窮会神習文庫本が注目される。

二、神習文庫本について

無窮会図書館の神習文庫に統詞花和歌集上下二冊（九九三七・井）が所蔵されている。「清水濱臣蔵書」の印があるが、濱臣の書写と認められる。下冊の末尾に次のようにある。先ず、藍筆で、「享和二年壬戌仲冬得一本校讎了」とあり、さらに墨筆で、「文化紀元甲子仲冬再校註所見」、朱筆で、「文化二年乙丑孟春以代々勅撰私撰家集物語等比較異同了」とあり、「泊活主人」と記す。「泊活主人」は、清水濱臣のことである。すなわち、この本は、清水濱臣によって、享和二年（一八〇二）十一月までに本文が書写され、藍筆で一本と校合（墨筆であるが「塙本」の名がみえる）、文化元年（一八〇四）十一月に後述するような大方の注が付けられ、翌年の一月に勅撰集、私撰集、私家集、物語などを用いて集付と校合がなされたことになる。以後、会田安昌の所蔵となり（「會田所蔵」の印あり、なお「神習文庫図書目録」は「清水濱臣、會田安昌校本」とするが、以上のように校合や注は主に濱臣のものと考えてよからう）、井上頼圀の所蔵を経て神習文庫に蔵された。ちなみに、『大日本歌書綜覧』（上巻、八三三頁）は「井上頼圀氏は清水濱臣の校正本を蔵す。享和二年

異本と校讐し、藍字を以て誌し、文化元年再校を朱書し、同二年代々勅撰私撰家集物語等にて異同を比較したるものと紹介している。また、泊泊舎蔵書目録（清水濱臣自筆）に「続詞花集二冊」とある。

三、清水濱臣と続詞花集

清水濱臣の伝記は、丸山季夫氏『泊泊舎年譜』（私家版・昭和三九年）により、詳細に知られるが、安永五年（一七七九）生まれ、文政七年（一八二四）八月十七日、四十九歳で、没している。

寛政四年（一七九二）十七歳で、村田春海に入門。文化五年（一八〇八）刊の『月詣和歌集』（いわゆる標註で、以下「標註月詣集」という。なお、濱臣の識語に「月詣集四卷享和元年より数本をあつめて対校としを経文化五年夏四月僻案を標註しへぬ別に附考数条を蛇足して巻末に添刻す此集清書なしたるは友人源正路也」とある）の四巻末に春海の「月詣和歌集跋」があり、次のような濱臣評が見える（後年、「琴後集」にも収載されている、引用は便宜に濁点、句読点を付けた）。

（前略）わが友清水濱臣常におもへらく、今は歌のまなびいとあさはかになりもてゆきて、ふるき集どもの世におほくのこりたるがあれど、これを見てよゝのすがたをかうがへ見むものとおもひたらず、いたづらに文殿のうちに高くつかぬれども、ちすの塵うちらはらふ事をだにものうくおもひ、むなしくからびつの底にひめおけども、つひにはしみのすみかとなりはつるがおほきは、をしむべきわざなり、かくしつゝとしへなば、おそらくは世にたえもぞせむ、さるは四條大納言のえらびおきたまへるくさぐ、又能因法師があつめおける一卷をはじめて、続詞華、雲葉、秋風、萬代のたぐひの集ども、もろくあるを、すべてつきゝに考へしらべて、われよく其傳へを廣からしめん、そのもろくあるが中に、重保あがたぬしの月まうでの歌こそ、ことに知る人もすくなく世によき本もなければとて、先これをとりて板にゑりなんとす。（後略）

「月詣和歌集跋」の末尾に「文化の五とせ後のみなづきはつかまりふつか」とある。「標註月詣集」刊行の文化五年は、

前述の神習文庫本統詞花集の朱筆の奥書にみえる文化二年の三年後である。「月詣和歌集跋」中の「統詞華」は神習文庫本統詞花集を指していると思われる。濱臣は、おそらく春海の指導があつたと思われるが、文化年間のはじめころまでに、いくつかの私撰集の対校、標註を行つており、そのひとつが統詞花集の場合であつたと考えられる。

四、濱臣注の方法

「標註月詣集」第四卷末に「校訂月詣集附考」を載せているが、その最後に「○校正趣意」という項目をたてている。そこで、次のように、記している（必要な前半部分を引用する）。

校正標註の體裁は、契沖阿闍梨の二十一代集校本の例にもとづけり。されど阿闍梨は千古の篤学廣才、予の如き疎学浅才まねび得べきにあらねど考證をむねとして私按をはぶかれし体を学び思ふが故に其さまにならへり。

阿闍梨の校本二十一代集古今六帖三十六人集曾丹集散木集難後拾遺堀川百首永久四年百首萬代集夫木抄のたぐひまであるに、此集の校本なきはいかでもらされけん、おもふに阿闍梨の著述校正の諸書には古今の歌書ひろく引用られたるに只此集を引用られし事たえて見あたらす。よりにて考れば、此集あることをしらずしてをはられけん、をしむべき事也。もし目にふれられたらんには諸書に引用られぬ事はあらし。又校正しおかれぬ事もあるまじき事とぞおもはるゝ。(後略)

神習文庫本統詞花集になされた濱臣注の方法は、「標註月詣集」の場合によく似ている。したがって、おおよそではあるが、神習文庫本統詞花集の體裁も「契沖阿闍梨の二十一代集校本の例にもとづけり」と考えることができる。なお、「契沖全集」第十五巻、第十六巻に収載されている「書入」を参照すると、濱臣が基にした契沖の方法がわかる。濱臣注の體裁を、便宜に次のように区分して概観する。

- (1) 集付、(2) 詞書、(3) 作者、(4) 歌本文について

(1)は朱筆で書かれ、識語の「文化二年乙丑孟春以代々勅撰私撰家集物語等比較異同了」に呼応するものである。つまり、同歌を所載する書籍（無論、統詞花集以後のものもあり出典とは限らない）を注記している。なお、(2)(3)(4)においても、朱筆は同時の記入と思われる。(2)は詞書中の人物についての注記（例えば天皇代数）、仮名書きに漢字を当てて、行間に語釈を書き入れるなど。(3)は「新院」に「崇徳」と傍書するように、官職のみの位置表記に名などを注記している。中には他書との比較で誤りや不審を頭注のかたちで「按するに」として記す（132・302・701・892・934など、例えば934「肥後」について「濱按散木集折句の部に此歌なしされは新拾に俊頼とせしは何によりしにか」とある）。(4)は、内容的に次のように分類できる。

a 他書との校合および落字などの指摘、b 掛詞の指摘、c 参考歌・類歌などの列挙による考証、d 表現の解釈、e 表現についての評など

a、bは主として本文の行間に傍書される（次節の具体例参照）。c、d、eは頭注の形式で書かれる。c、dの例は次節に後述するが、cの参考歌・類歌などの列挙において用いられた諸書を整理すると次の通りである。逐一の考察は省略する（二部次節で言及する）が、「泊泊舎藏書目録」（清水濱臣自筆）にあるような豊富な書籍を基にした濱臣の古典研究の一環の中で統詞花集の注も検討されるべきであろう。

万葉集、二十一代集（ただし統後撰集と新後拾遺集の引用はない）、私家集（小町、躬恒、仲文、順、元輔、兼盛、古本能宣、清慎公、実方、清少納言、赤染衛門、散木奇歌、顕輔、堀河、清輔、山家、拾玉、異本拾玉、壬二、拾遺愚草、拾遺愚草員外、隆信）、百首歌（堀川百首、堀川次郎百首、久安百首、正治百首、貞応三年百首）、私撰集（和漢朗詠、後葉、月詣、雲葉、新撰和歌六帖、万代、新葉、夫木）、古事記、日本紀、舒明紀、竹取物語、伊勢物語、うつほ物語、源氏物語、狭衣物語、土佐日記、枕草子、栄花物語、続世継（今鏡）、宝物集、沙石集、老子、莊子、毛詩、白氏文集、元稹、南史陳後王紀、千手陀羅尼經、俊頼口伝抄、奥義抄、袋草紙、袖中抄、長明無名抄、八雲御抄、新撰字鏡、

和名抄、集韻、庭訓往来、拾芥抄

eは、例えば「きはの詞つかひやうめつらし」(57)、「へきといはすしてはてるをは叶はず」(893)などのコメントを指す。また、「考証をむねとして私按をはぶかれし体を学び思ふが故に其さまにならへり」(前掲の「標註月詣集」第四卷末の「校訂月詣集附考」中「○校正趣意」とある通りであるが、按注がいくつも見られる。なかには次のような「光房」(濱臣養子)の按注も散見する。98歌の例をあげておく。

卯月の朔日に山寺に桃のはなのさきけるをみて

僧都源信

山里のもゝのはなやゝさきにけりみやこは今やうつきなるらん

詞書「はなのさきける」の「の」に「ナシイ」と右傍書、「き」の右に藍字で「けり」と傍書。歌結句「う月なるらん」とあり「月」を見せけちにして「つき」とする。そして、頭注に次のように記す。

濱按卯月に卯月を准てよめるなるへし

光房按卯木にかけたるにはあらし

白氏文集第十六大林寺桃花人間四月芳菲尽山寺桃花始盛開 此本文によれるのみ也

五、具体例

a うつほ物語と濱臣注

『うつほ物語』を引いて注している歌が四例ある。濱臣にとつて、うつほ物語の読解は大きな意義をもっていたと思われる、本文の書写(吉田幸一蔵の濱臣筆本があるが、稿者未見)や著書『宇津保物語考証』が知られる。次に一例ずつ検討する。本文の引用は神智文庫本による。便宜に頭に国歌大観番号を付す。

後一条院御いかのひよみ侍ける

入道前太政大臣

332 いかにかいかにいかゝかそへやるへきやちとせのあまりひさしき君か御代をは

詞書の「後一条院」の左に「六十八代」、「いか」の左に「五十日」と傍書。作者名の「入道前太政大臣」の左に「道長公」と傍書。初句の右に朱で「続古賀」、左に同じく「五十日如何兼」と傍書。首書形式の注（以下、頭注という）に、次のようにある。

紫式部集 御いかのよとのゝ歌よめとのたまはずれば

いかにいかゝかそへやるへき云々

との

あしたつのはひしあらは君か代の千とせの数もかそへとりてん

空穂蔵開 いかにくときゝわたれとも今日をこそもちひくふひとわきてしりぬれ

紫式部集の引用は332歌の出典を示している。うつほ物語の歌は初句の類似表現を持つ用例として挙げられている。日本古典文学大系（以下、大系本）の『宇津保物語』二の「蔵開上」三二八頁五行目にみえる歌である。

かた岡のやしろにかきつたりける歌

よみ人しらす

366 かたをか人と人はいへともわれはたゝたかき山ともたのまるゝかな

頭注に次のようにある。

片岡は賀茂八所の一所也といへり

千載 賀茂政平

さりとともたのみそかくるゆふたすきわかたをか神とおもへは

山家集下 賀茂

なかつきのちからあはせにまけにけりわかたをかをつよくたのみて

竹取物語に云 船にのりては梶取のまうす事をこそ高き山ともたのみ

空穂物語祭使云 たゝたかき山とのみたのみきこえてなん

舒明紀

千載集と山家集の例歌は、上句の類例。竹取物語とうつほ物語の引用文および舒明紀（日本書紀卷二十三、「如高山一侍之」（大系本二二三頁十三行目）とある）は、下句の類例。うつほ物語の引用は、大系本一・四二六頁八、九行目にみえる一文。注意すべきは濱臣の著である『宇津保物語考証』で「たかき山」の語句に注解を加えており、同様に竹取物語を引き、「統詞花神祇」として366歌を引いている（国文注釈全書六〇〇頁下段）。統詞花集の注釈が濱臣の学問において、どのように位置づけられているかが窺われる。『宇津保物語考証』について、片桐洋一氏「清水濱臣空穂物語考証首巻」（『女子大文学』二十号、昭和四四年）参照。

女の許にまかれりけるにかみあらふほどなりと

てあはざりければ

二条関白前太政大臣

808 今よりはゆふかけてこむ千はや振神あらはるゝところなりけり

詞書の「かみあらふほとなり」のところ、「かみあらふほとなる」とあつて、「る」を見せけちにして「リイ」とする。第二句「ゆふかけてこむ」の「ゆふ」の左に「夕木綿兼」と注記、第四句「神あらはるゝ」の「神」の左に「髪兼」、「あらはるゝ」の左に「洗現兼」と注記する。頭注に次のようにある。

金葉恋下 ある所にて女房のなかき髪をうち出してみせければよめる 藤原頭綱

ひとしれすおもふ心をかなへなんかみあらはれて見えぬとならば

うつほ葺開中 上略けふは御ゆるこそ

何にかもさくとはきかぬあふことをけふあははるゝ神は何そも

うつほ物語の引用は、大系本二・三七六頁六から八行目にみえる仲忠消息中の一文。「御ゆるる」は洗髪のことである（河野多麻氏『うつほ物語傳本の研究』「第二部本文批判」七二―頁参照）、延宝五年版本は「御ゆるる」とある。歌本文は版本に同じ（ただし、四句目は「けふあらはるゝ」、大系本校異参照）。

惠慶法しはりまの講師になりてきたるに 権僧正尋禪

979 うちにはへてとねりのねやにいる人ははりまかちにやあらんとすらん

初句「うちはへて」の左に「刀をうつによせたるか」と傍書。第四句「はりまかちにや」の「かち」の左に「鍛冶加持兼」と注記する。頭注に次のようにある。

空穂物語国譲下 なそ君の内に入るとねりのねやの法師のやうにては逃給ふとてひきもてきて云々

拾遺雑下 建守法師

山ふしも野ふしもかくて心みつ今はとねりの聞そゆかしき

仲文集 法師のそのにをとこありとて法師のうれへ申さむといふをきゝて
いにしへはとねりのねやの物かたりかたりあやまつ人そあるらし

按とねりのねやといふ物語ふるくより有てとねりのねやへ法師のかたらひし事もかけりとおほゆ此集も其事をおもひてよめるならんその物語のくはしき事つたはらねは解しかたし

うつほ物語の引用は、大系本二・四一七頁五行目にみえる一文。すなわち、「蔵開下」である。濱臣注が「国譲下」とするのは誤り（ただし、無窮会蔵の大久保本「うつほ物語考証」では、国譲下に一文を挙げ仲文集と拾遺集の歌をひいて注解している）。

播磨に下る恵慶法師を「舎人のねやに入る人」というのは、舎人の宿所に僧が忍び込むという稚児物語的な伝承をふまえる。濱臣の引く用例は現在も有効である。なお、濱臣は「うちはへて」に「刀をうつによせたるか」とし「かち」のところに「鍛冶加持兼」とするが、次の歌「墨の色の紅深くみえけるは筆を染めつつ書けばなるらん」の連想から言つて「はりまかち」は播磨褐（飾磨の藍染）のことか。

b 枕草子と濱臣注

『枕草子』を引いて注している歌が三例ある。次に一例ずつ検討する。

題しらす

大僧正覚忠

966 あふことはかたおどりするやまからすいまはかうとそねはななけれ

第四句「いまはかうとそ」の「かう」の二字の右に朱でそれぞれ〇印をうち、左に「鳥声ニ如此トカケタリ」と傍書

がある。頭注に次のようにある。

かたをとりはまた巢たちたるよりほとなきをいふがかたなりのかたに同じそれをあふことの難きにいひよせたり
枕草紙あさましきもの かならずきなんとおもふ人をまちあかしてあかつきかたにたゝいさゝかわすれてねいり
たるにからすのいとちかくかうとなくにうち見あげたれはひるになりたるいとあさまし此詞によりてよめる也
「かう」は「如此」の意に「かたをどりするやまがらす」の鳴き声を掛けているとして枕草子「あさましきもの」を
引いている。引用の本文は枕草子春曙抄によつてゐる。(なお、校本枕冊子によると、鳥の鳴き声は「かゝ」がほとんどだ
が、三巻本二類中の古粹堂文庫本、内閣文庫本は「かう」とする)。春曙抄の頭注には統詞花集のこの歌が引かれている。
濱臣は、春曙抄によつて枕草子を読んでいたと考えられるが(後述)、その注に統詞花集が用いられている事がひとつ
の契機になつて統詞花集の読解に及んだのかもしれない。

おやを海におとしいれたる聞えある人の七月

十五日おやの為に盆供そなふるを見て

道命法師

992 わたつうみにおやをゝしいれて此ぬしのほんするみるそあはれなりける

詞書の「盆供そなふる」は「盆供そなふ」とあり「ふ」の下に。をうち、右傍に「るイ」と藍字(「イ」は墨)で注記してある。初句の左に「枕草紙」と朱書。「おやをゝしいれて」の「ゝ」の部分に・をうち右に藍字で「おい」とし、さらに朱で「枕」とある。頭注に次のようにある。

枕草紙うちとくましきものゝ段

右衛門のせうなるものゝえせ親をもたりて人の見るにおもてふせなと見くるしう思ひけるか伊豫の国よりのほる

とて海におとし入れてけるを人の心うかりあさましかりけるほとに七月十五日ほんを奉るとていそくを見て

道命阿闍梨

わたつうみに云々

盆の字音に水音のほんとおとするをよせたるうた也

前例同様、春曙抄によつていと考えられる。春曙抄は「わたつうみに親を」を注して「このぬしとは此人といふ詞を子たる物のといふ心にかへられし也。此歌は五逆の悪人ながら、うら盆に悪念をひるがへして善業をなすか。懺悔滅罪のことはりを哀める心にや。此うた統詞花集にいれり」とある。濱臣自筆書き入れの枕草子春曙抄（無窮会蔵による）には、本文の道命阿闍梨歌の初句の右に朱で「統詞花戯咲」と傍書している。また、「ほん」の右傍に朱で○をうち、欄外に「盆の字音の人を水に落す音をいひよせて歌とせる」と書き入れている。枕草子の研究が統詞花集の注釈にも活用されていることが窺われる（丸山季夫氏『泊泊舎年譜』二三三頁によれば、竹柏園蔵の枕草紙春曙抄十二冊校合本について「寛政十二年正月至七月初校、文化元年二月再校私案を注記、同四月至十月泊泊舎にて東海林長享と万葉抄によりて対校、文化十四年七月発会、十五年四月卒業す」と説明する。一応、文化元年二月の春曙抄の注が文化元年十一月の統詞花集の注に先行するとしておく）。

濟田仲胤はかたちのにくさけなるをかたみにお

にとつけてなんいとみわらひけるに濟田公譜に

まいらすとて綱所の下部つきて房をこほちたく

なりときゝていひつかはしける

僧都仲胤

997まことにや君かつかやをやふるなるよにはまされるこゝめありけり

返し

僧都濟圓

998 やふられてたちしのふへきかたもなし君をそたのむかくれみのかさ

詞書の「かたみに」の左に「互」と傍書。「おにとつけてなんいとみわらひけるに濟円公請に」の部分が行間に細字で書かれ挿入の格好になっている。また「つけて」の左に「号」と傍書。「こほちたくなり」とは「こほちたくなり」とあり「と」は藍で見せけち、墨で「イナシ」と右傍書。997の初句右に朱で「統世継かさりたち」、998には「同上」とある。「つかや」の「か」の右に「まか」とある。「やふる」の右に朱で「こほつ同」、以下朱で、「こゝ」(「うゝ」とよめる)を見せけちにして「こゝ同」(墨で「イ」。「かたもなし」の「も」の右に「そ」、「し」の右に「き同」。「かくれみのかさ」の「さ」の右に「せ同」(墨で「イ」)。朱は「統世継」(「今鏡」)との校合を示している。頭注に次のようにある。

統世継云ならに濟圓僧都ときこえし名僧の公請にさはり申ければ京の宿房こほちけるに山に忠胤僧都ときこえしとたはふれかたきにてみめ論してもるともにわれこそ鬼なといひつゝうたよみかはしけるに忠胤これをきゝて濟圓かりいひつかはしける

まことにや云々

かへし

やふられて云々

拾遺十八 しひたる人のもとにつかはしける

平公誠

かくれみのかくれかきをもえてしかなきたりと人にしられさるへく
躬恒集 しはすのつこもりによるのおにを

おにすらも都の中とみのかさをぬきて今夜や人にみゆらん

枕草紙 かくれみのとられたる心ちして

狭衣 かくれみの、中納言の二のまひにやならん

宝物集一 隠れ蓑ノ少將ト申物語モ云々

続世継（今鏡）は、同歌を載せる参考文献。拾遺集、躬恒集、枕草紙、狭衣物語、宝物集の引用は「かくれみの」の用例。春曙抄の当該箇所「かくれ所なきをいふ也」とある。

互いに容貌の醜さを鬼と名付けて「いどみわら」っていた濟円と仲胤。濟円が公請に不参の罪で坊を壊されたと聞いて、仲胤が「塚屋（鬼の住処）」を壊されたと聞いたが、世の中にはあなたよりひどい「ここめ」（鬼）がいたものだと言い送ったところ、濟円は、僧坊を壊されて人目を避けるすべもない、あなたを頼るほかない、（鬼が姿を消すために大切にしているはずの）隠れ蓑を貸して欲しいと答えたという内容である。

以上、うつほ物語と枕草子の引用を例にして濱臣注を考えた。なお、神習文庫本続詞花集が引く文献の豊富さは前述の通りだが、逆に他の濱臣の校本著述の類に続詞花集を引用する場合も少なくない（例えば、前述の「標註月詣集」、堤中納言物語ほか）。続詞花集の注釈が、濱臣の古典研究の重要な一環としてあったことが知られる。濱臣自筆の新撰字鏡索引がある由（前掲丸山著。なお、新撰字鏡は天治本発見以前であるので節録本と思われる）であるが、このような書の活用も考えられる。また、濱臣注には現在も有効な注のあることを指摘しておきたい。